

日行連発第 1364 号
平成 29 年 1 月 25 日

各単位会長 様

日本行政書士会連合会
会長 遠田 和夫
第三業務部
部長 光宗 五十六

対日直接投資推進会議規制・行政手続見直し WG 緊急報告について

平素より本会の事業推進について、御理解、御協力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、本会では内閣府規制改革推進室が実施する規制・行政手続に関するヒアリングに参加して、士業者の観点から事業者が負担になっている規制等について、意見・説明の対応を図ってまいりました。

現在、同室において継続的に検討が進められているところですが、対日直接投資に係る規制の見直しについては、結論が出されたことから、先行的に緊急報告として集約されました。

つきましては、別紙のとおり周知依頼がありましたので、各単位会におかれましては、所属会員への周知をお願いいたします。

なお、本件につきましては、あわせて本会会員ページ「連 con」にも掲載することを申し添えます。

【別紙】

- ・対日直接投資推進会議規制・行政手続見直しワーキング・グループ緊急報告の周知について（依頼）
- ・「緊急報告」
- ・「緊急報告」概要

【内閣府ホームページ】

http://www.invest-japan.go.jp/promotion/simplify_wg/index.html

以上

事 務 連 絡

平成 28 年 12 月 22 日

日本行政書士会連合会 御中

内閣府対日直接投資推進室

対日直接投資推進会議規制・行政手続見直しワーキング・グループ
緊急報告の周知について（依頼）

貴団体におかれましては、益々御盛栄のこととお慶び申し上げます。

内閣府では、外国企業の日本への投資を推進するため、対日直接投資推進会議を開催しており、その中で、外国企業が日本で投資を行うに際して課題となる規制・行政手続の簡素化について検討するための規制・行政手続見直しワーキング・グループを設置し、本年 8 月より法人設立や在留資格等の規制・手続における課題について議論を行ってまいりました。

本日、これまでの検討を踏まえ関係省庁等において実施することとした具体的取組について、別添のとおり、緊急報告をとりまとめました。

つきましては、この内容について、外国企業の支援を行っている方をはじめ、行政書士の方に広く周知いたしたく、貴会より、会員の皆様に対し、お知らせいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、緊急報告については、下記ホームページに掲載しております。

http://www.invest-japan.go.jp/promotion/simplify_wg/index.html

[連絡先]

内閣府対日直接投資推進室 別所、入江、堀

電話 03-6257-1540

対日直接投資推進会議 規制・行政手続見直しワーキング・グループ
緊急報告

平成 28 年 12 月 22 日

I. 検討の経緯

我が国は、アベノミクスの取組により、日本企業のみならず外国企業にとってもビジネスのしやすい環境の整備を進めてきた。特に、対日直接投資推進会議においては、外国からの投資の拡大に向けて、「外国企業の日本への誘致に向けた5つの約束」（平成 27 年 3 月 17 日）や「グローバル・ハブを目指した対日直接投資促進のための政策パッケージ」（平成 28 年 5 月 20 日）を決定し、外国企業の事業環境や外国人の生活環境の改善に取り組んできた。これらの効果もあり、我が国の投資先としての魅力についての外国企業の評価は改善し、対日直接投資は増加してきている。

他方で、外国企業からは、依然として、規制・行政手続の煩雑さ等が、我が国でビジネスを行う上での主な阻害要因として指摘されている。このため、「グローバル・ハブを目指した対日直接投資促進のための政策パッケージ」や「経済財政運営と改革の基本方針 2016」（平成 28 年 6 月 2 日閣議決定）、「日本再興戦略 2016」（平成 28 年 6 月 2 日閣議決定）において、外国企業の日本への投資活動に関係する規制・行政手続の抜本的な簡素化について 1 年以内を目途に結論を得る（早期に結論が得られたものについては、先行的な取組として年内に具体策を決定する）こととされた。

こうした方針を受け、対日直接投資推進会議規制・行政手続見直しワーキング・グループにおいては、外国企業や外国企業を支援している専門家等から指摘された規制や行政手続に関する課題や見直し策について、本年 8 月以降議論を進めてきた。これまでの検討を踏まえ、関係省庁等において実施することとした具体的取組について、以下のとおり、緊急報告としてとりまとめる。この緊急報告でとりまとめた事項については、速やかに実行いただきたい。

引き続き検討を進め、来春を目途に最終的なとりまとめを行う。

II. 分野毎の課題及び対応

1. 法人設立・登記関係

(1) 出資金の払込証明

課題①

外国企業が子会社の株式会社を日本国内に設立する際には、発起人又は設立後の法人の代表取締役となる者の銀行等の口座（国内銀行口座等）に、出資金の払込みを行わなければならない。また、設立登記申請時に当該払込みがあったことを証する書面の提出が必要とされている。一方、発起人である外国企業や海外在住の代表取締役と

なる予定の者は、日本に住所がなく日本国内で銀行口座等を開設することは現実的には困難である。このため出資金の払込みを行うことができず、会社設立の手続を円滑に進めることができない。

(対応)

- 払込証明のために利用できる銀行口座の名義について、設立時の会社の財産として発起人が実質的に管理し得る体制が確保されている場合には、第三者でもよいこととすべく、具体的な要件等について速やかに検討を進め、平成 28 年度内を目途に施行する。【法務省】
- 会社法で認められる出資金の払込取扱機関の範囲について、邦銀の国内支店、外国銀行の国内支店以外に、邦銀の海外支店が含まれることを、平成 28 年 12 月 20 日付け法務省民事局長通達により明確化し、関係者への周知を行った。また、金融庁においては、10 月から、世界各地で拠点を展開する邦銀(いわゆるメガバンク 3 行)に対して態勢の整備を要請しており、各行においては、速やかに態勢の整備を行うこととしている。【法務省・金融庁】

(2)サイン証明書

課題②

印鑑証明書を有しない外国人が法人設立等に関する登記を行う場合は、印鑑証明書の代替として、本国官憲の作成したサイン証明書(署名証明書)が必要となることがあるが、サイン証明書を取得できる場所は、本人の国籍国か日本(日本における国籍国領事¹⁾)に限定されるとされていた。そのため、第三国に居住している外国人は、サイン証明書の取得のために国籍国か日本まで移動する必要がある、大きな負担となっている。

(対応)

- 平成 28 年 6 月 28 日付けで民事局長通達を发出し、サイン証明書の取得において、現実的な不都合がないよう、取組を進めている。具体的には、法人設立等の手続におけるサイン証明書の取得について、本人の居住国(居住国における国籍国の領事等)等の第三国における国籍国の官憲によることも可能であるとした。また、国籍国の法制上の理由等の真にやむを得ない事情から国籍国官憲の発行するサイン証明書を得ることができない場合についての救済措置として、日本の公証人又は居住国の官憲の作成した署名証明書が許容されるなどの運用を行うことを明記した。【法務省】
- 外国人が来日した際に、法人設立等に必要なサイン証明書を取得できるよう、国籍国や居住国においてサイン証明書の取得が可能であっても、日本における国籍国の領事がサイン証明書を発行していない場合には、日本の公証人によるサイン証明書

¹ 日本における領事が日本における法人設立等のためのサイン証明書の発行を行わない国もある。

でよいこととする方向で検討²を行い、年度内に結論を得て、実施する。あわせて、日本の公証人又は居住国の官憲の作成したサイン証明書が許容される場合について、事例を明示する。【法務省】

(3) 会社設立に関する通達の情報発信

課題③

会社設立に関係する通達については、一部の簡単な記述を除いて法務省ウェブサイトに掲載されておらず、日本に子会社を設立しようとする外国企業やその支援を行う者が、会社法に関する手続の運用状況を容易に確認することができない。

(対応)

- 平成 28 年 9 月 28 日に、法務省ウェブサイトにおいて、「商業・法人登記関係の主な通達等」のページ³を新たに立ち上げ、平成 18 年の会社法施行以降の主な関係通達の全文の掲載を行った。【法務省】

(4) 登記申請書類の翻訳

課題④

外国企業が日本国内において子会社設立や支店の設置を行おうとする際、法務局や公証人への提出書類が外国語の場合は通常日本語訳を求められる。その際、申請等の内容に関わらない部分⁴についても日本語への翻訳を求められる場合があり、外国企業等の負担となっている。

(対応)

- 定款認証や内国の株式会社の登記、外国会社の登記等に係る提出書類の日本語への翻訳を省略することができる例について、登記手続における取扱いの実態を踏まえつつ、平成 28 年度内を目途に明確化し、その周知を図る。【法務省】

(5) 割サイン手続

課題⑤

定款認証等の際、その作成の真正を担保するため、実務上、割印を求めているが、申請者が外国企業等の場合、割印の代替手段として、法人代表者等に割サインを求めている。割サインは、外国にはない習慣であり、代表者等に対する事前説明、外国との書類の郵送のやりとり等、実務的には多大な手間や日数がかかっている。

² 具体的手続として、国籍国の領事がサイン証明書を発行していない旨の上申書と日本の公証人の作成した証明書をもって印鑑証明書に代えることができるようにするとともに、その際、大使館等に確認し、サイン証明書を発行していない旨の回答があったことを記載すれば足りるようとする方向で検討する。

³ http://www.moj.go.jp/MINJI/minji06_00098.html

⁴ 例えば、外国会社の日本における営業所（支店）の登記手続の際に提出する当該外国会社の取締役会議事録のうち、当該営業所に関する内容以外の部分。

(対応)

- 外国企業や海外在住者が発起人となる場合の定款認証手続等において、割サインによらない対応の在り方についての検討を行い、平成 28 年度中に結論を得る。【法務省】

(6) 法人設立後の銀行口座開設

課題⑥

外国企業の子会社等として新たに設立された日本法人について、銀行口座の開設に時間がかかったり、断られたりすることがあり、日本で本格的に事業を開始させたい企業にとって、時間的・経済的損失となっている。

(対応)

- 金融庁において、メガバンク 3 行に対し、外国企業が設立した内国法人や支店の銀行口座の開設が円滑に進められるよう、対応できる支店等の集約、情報の共有、事務取扱の徹底等の態勢を早急に整備することについて要請を行った。なお、金融庁からの要請を受け、3 行は、年内を目処に態勢の整備を行うこととしている。【金融庁】

2. 在留資格

(1) 手続の負担

課題①

在留資格に関する手続について、入国管理局の窓口に出向いて手続を行う必要があるため煩雑であることに加え、窓口が混雑しており手続に時間がかかる。

(対応)

- 在留資格に関する手続のオンライン化を平成 30 年度より開始すべく、平成 29 年前半を目途に対象とする手続の範囲等オンライン手続の全体像やシステムの詳細等を検討した上で、所要の準備を進める。【法務省】

課題②

在留資格に関する手続について、標準処理期間は公表されているが、申請から認定までに時間がかかる場合があり、所要時間の見通しが立たない。

(対応)

- 申請者が手続に要する期間の見通しを立てる参考となるよう、手続期間の実績データの公表を平成 29 年度早期に開始するとともに、在留資格に関する手続のオンラ

イン化の検討に併せて、オンライン申請案件の進捗状況（申請受付、審査中、結果通知済等）をオンライン上で確認できる仕組みの導入について検討する。【法務省】

(2) 高度外国人材

課題③

高度外国人材を更に呼び込むべき。

配偶者の就労や家事使用人の受入れ等、帯同者に関する在留資格の要件が厳しいため、高度外国人材を日本に呼び込みにくい。

(対応)

- 高度外国人材の永住許可申請に要する在留期間を現行の5年から大幅に短縮する世界最速級の「日本版高度外国人材グリーンカード」を平成28年度中に創設する。【法務省】
- 高度外国人材については、配偶者のフルタイム就労や家事使用人の受入れが認められているところであるが、高度人材ポイント制について、評価項目の追加等要件の見直しを平成28年度中に実施し、高度外国人材の受入れを促進する。【法務省】
- 高度外国人材が、我が国への入国後に、本国に残った家族の家事に従事している等の家事使用人を我が国に呼び寄せたいというニーズに対応するため、高度外国人材の帯同する家事使用人の受入れ要件の見直しについて検討を行い、所要の措置を講じる。【法務省】

3. 行政手続のワンストップ化（東京開業ワンストップセンター）

課題①

国家戦略特区においては、昨年4月に東京開業ワンストップセンターが開設され、公証人による定款認証、商業登記、税務（国税・都税）、年金・社会保険、在留資格認定証明書等の法人設立に係る手続を集約化するための各ブースが置かれているが、国税・商業登記に関する申請を受け付けていないなど、取扱業務が限定されているため、利便性をさらに向上させるべき。

(対応)

- 東京開業ワンストップセンターにおいて、平成28年12月22日より、申請の窓口で8種類全ての手続について、書類作成のアドバイスも受けつつ、受付まで行うことを可能とする。【内閣府（地方創生推進事務局）等】
- あわせて、登記、税務、年金等の6事務について電子申請を行うことができるように申請用パソコンやICカードリーダライタ等の環境を整備するとともに、電子申請をサポートする体制を整備する。【内閣府（地方創生推進事務局）等】

課題②

東京開業ワンストップセンターで申請可能な在留資格関係の対象が「経営・管理」、「企業内転勤」のみで、かつ法人設立後6か月以内の場合に限定されているため、利便性をさらに向上させるべき。

(対応)

- 平成28年12月22日より、東京開業ワンストップセンターで申請を受け付ける在留資格の対象に「技術・人文知識・国際業務」を追加するとともに、センターで申請できる法人の範囲を現行の法人設立後6か月以内から段階的に拡大し、平成30年4月を目途に、法人設立後5年以内のものまで拡大する。【内閣府（地方創生推進事務局）等】

4. 外国語での情報発信

課題①

各省庁からの外国語での情報発信が不十分。発信されていないことも多く、最新版になっていないこともある。

(対応)

- 事業活動と生活に関するニーズの高い情報について、各省庁が外国語での発信を強化する。
＜取組例＞
 - 外国企業等による利用が見込まれるe-Taxの主な操作マニュアルや、主要な申告書及び通知書等の情報を英語で作成し、ウェブサイトに掲載する。【国税庁】
 - 社会保険等の手引きを英語で作成し、ウェブサイトに掲載する。【厚生労働省】

課題②

外国語で発信された各省庁の情報も、一覧性に乏しく、たどり着きにくい。

(対応)

- JETROのウェブサイトを各省庁の外国語情報に関するポータルサイトとする。情報の拡充・更新が円滑に進むための体制を整備する。

5. 輸入

(1) 統計品目番号（HSコード⁵等）

課題①

輸入品について、通関の際に使われる統計品目番号の分類確認作業に時間がかかることがあり、また、その際のやり取りが企業の負担になっている。あわせて、税関ウェブサイトにおいて、統計品目番号・品目名・他法令⁶・関税率等の情報提供を行っているが、他法令に基づき必要となる手続についての情報提供等が十分でない。

(対応)

- 衣類に係る統計品目番号の国内細分のうち関税率の違いに基づく分類の必要がなく統計把握の必要性の低い国内細分の統廃合を、Tシャツは来年度に実施し、残りについても再来年度の実施に向けて検討を行う。衣類以外の国内細分についても、関係省庁において、削減のための取組を進めていく。なお、平成29年度関税改正において、がん具に係る国内細分の統合を予定している。【財務省等】
- 品目分類の協議に当たり、英語の資料について必要以上の日本語情報の提供を求めるとや不要な質問等により事業者に過度な負担をかけることがないように引き続き徹底する⁷。【財務省】
- 税関ウェブサイト上で公表している実行関税率表等（日本語版及び英語版）において、統計品目番号等ごとに対象となる他法令手続や所管省庁等を確認できるよう、平成28年度内を目途に改善を行う。その際、所管省庁のウェブサイト上の他法令の具体的な手続が示されているページ等へのリンクを設定するなど、利便性を高める。【財務省】
- 品目分類に関する事前教示回答事例を参照するユーザーの利便性向上を図る観点から、ウェブサイト上の事前教示回答例において、事業者の理解が得られた場合等に、事前教示照会物品の写真の掲載を行うことを検討する。【財務省】

⁵ 輸入に係る物品の品目分類のための番号であり、WCO（世界税関機構）が定める世界共通の6桁の数字をHSコードという。また、その下に各国が独自に細分を設定することが認められており、日本では、関税率の設定や統計の把握を目的として、下3桁（国内細分）を定め、9桁となっている（統計品目番号）。HS（Harmonized System）条約には、2016年12月現在、日本をはじめ153カ国及びEUが加盟しており、HSコードを使用している国・地域は、未締約国を含め計200以上で、国際貿易の98%を超える取引にHSコードが利用されている。国によってHSコードの運用が異ならないようHS条約及びHS条約に基づく「関税率表の解釈に関する通則」が定められている。なお、HSコードについて日本と外国で取扱いが異なる場合には、世界税関機構のHS委員会等において、加盟各国と協力しながら、HS条約等の統一的な解釈の確保を図ることとしている。

⁶ 貨物を輸入しようとする場合において、貨物の種類によっては、輸入許可の前提として、関税関係法令以外の法令（食品衛生法、家畜伝染病予防法等）の規定に基づく手続の完了を税関に証明する必要がある。

⁷ 税関における輸入許可前であっても、新規の輸入品であることから品目の分類に時間を要する等の場合にあっては、所要の手続を行うことで、例外的に貨物を引き取ることが可能である。

(2) 日本工業規格（JIS）

課題②

製品の国際規格が作成されてからJISに反映されるまでに数年かかっているため、外国企業は、新しい国際規格に基づく検査を終えている商品でも、日本に輸出するためだけに、古い基準で検査をし直さなければならないことがある。また、商品の表示に関する国際整合性が十分ではない。

(対応)

- 国際規格の発効後速やかにJISを改定できるよう、可能なものについては、国際規格の作成段階からJISの改定作業（原案作成作業）を開始するなどの取組を推進する。特に、電気用品安全法に引用される可能性の高いものについては、国際会議において規格制定・改定の議論が開始された段階で、業界団体等に周知し、会議への参画を促すとともに、必要に応じ、早期の段階からJISに関する検討の着手を促進する。【経済産業省】
- 経済産業省の日本工業標準調査会におけるJISの審査プロセスについて、開催頻度の増加等により迅速化を図る。【経済産業省】
- 洗濯表示に関するJISを国際整合化した後、このJISにならった記号を用いるよう義務付けている繊維製品品質表示規程を改正し、平成28年12月1日から施行した。【経済産業省・消費者庁】

(3) 食品衛生法の規制・手続

課題③

食品衛生法における器具・容器包装（食器等）の規格基準については、日本ではネガティブリスト制度⁸を採用しているが、欧米ではポジティブリスト制度⁹を採用しており、国際的な整合性がとれていない。

(対応)

- 食器等の規格基準についてのポジティブリスト制度の導入に向けて、「食品用器具及び容器包装の規制に関する検討会」において、食等の安全性を高めるための具体的な仕組みについて検討を行い、年度内を目途にとりまとめを行うなど、取組を進める。【厚生労働省】

課題④

食器等の輸入時に、検疫所に聞かなければ、そもそも食品衛生法の検査対象なのかや検査にサンプルが何個必要かが分かりづらい場合がある。また、厚生労働省におい

⁸ 使用を原則認めた上で、使用を制限する物質をリスト化する制度。

⁹ 使用を原則禁止した上で、使用を認める物質をリスト化する制度。

て登録されている外国公的検査機関の試験成績書を検疫所に提出しても、追加の確認や日本独自の訂正を求められる場合がある。さらに、これらについて、検疫所によって取扱いが異なる場合もあり、企業側の負担となっている。

(対応)

- 食品衛生法に基づく食器等の検査に必要となるサンプル数の目安や試験成績書に最低限記載すべき事項・留意点などについて、必要な情報を整理した上で、年度内を目途に厚生労働省ウェブサイト等で情報提供を行う¹⁰。【厚生労働省】

6. その他

(1) 建設業許可の要件

課題①

建設業の許可を得るための要件として、建設業において経營業務管理責任者として一定の経験を有する者（役員又はこれに準ずる者等）を、常勤の役員として配置することが求められる。しかし、外国企業が当該要件を満たす人材を確保して日本の現地法人に役員として配置することは人事運営上困難であり、建設業の許可を得ることが難しくなっている。

(対応)

- 平成 27 年 6 月に閣議決定された規制改革実施計画において、建設業許可基準の見直しに関し、次のように措置することとしている。
 - 5 年の経験年数や、同等の能力を有する者の要件の経験年数について、経験を代替する研修制度の創設などにより一定程度短縮することの可能性について検討する。【平成 27 年度検討開始、28 年度結論・措置】
 - 建設業の適切な経営を担保するための建設業の許可基準の在り方について、規制の目的に見合った適切かつ合理的な許可要件等への見直しも含めて、検討する。【27 年度検討開始】

上記措置を実施するべく、中央建設業審議会基本問題小委員会（平成 28 年 1 月 27 日から議論）の中間とりまとめを踏まえ、建設産業政策会議（平成 28 年 10 月 11 日に第 1 回開催）において検討する。【国土交通省】

(2) 国外にわたる職業紹介事業に関する申請書類の翻訳

課題②

国内外にわたる職業紹介事業を行うためには、労働局に対して申請・届出を行う必

¹⁰ おもちゃについては、一部が食品衛生法の対象となる。厚生労働省ウェブサイトにおいて「おもちゃQ & A」を公表しているが、おもちゃには様々な態様があることから、検疫所において個別具体的な判断を要する場合もある。

要があるが、その際、労働局から相手先国の関係労働法令の全訳の提出を求められており、事業者に大きな負担となっている。

(対応)

- 事業者の負担をできる限り軽減する観点から、各労働局に提出する書類について、平成 29 年 1 月中を目途に、適正な許可等の手続に必要な範囲を明確化し、それを超えて外国の労働法令及びその日本語訳の提出を求めないよう、各労働局における取扱いの徹底を図る。【厚生労働省】

(3) 未承認医療機器の展示

課題③

未承認医療機器の展示について、どのような場合に医薬品医療機器法に抵触せず出展が可能なのか、どのような場合に認められないのかが分かりにくい。

(対応)

- 未承認医療機器の展示会等への出展の可否について、年度内に、医療機器関係団体から運用における不明点等を確認した上で、ルールの明確化や周知方法について検討する。【厚生労働省】

対日直接投資推進会議 規制・行政手続見直しワーキング・グループ
緊急報告(概要)

平成28年12月22日

外国企業の日本への投資活動や事業展開に関して、煩雑さが指摘されている規制・行政手続の見直しについて議論を行い、各省庁等において実施することとした取組を緊急報告としてまとめたもの。

1. 法人設立・登記関係

- 外国企業等が、日本国内で自らの銀行口座を開設せずとも、出資金の払込証明を作成し、子会社の株式会社を設立できるよう、
 - ① 出資金払込みの口座の名義人の範囲を拡大
 - ー 外国企業等が出資金払込みのために利用できる口座の名義人について、発起人や設立時代表取締役に限らず、発起人の委任を受けた者であればよいこととする方向で検討し、年度内を目途に施行する。【法務省、28年度内を目途】
 - ② 払込先の金融機関の対象を拡充
 - ー 邦銀の海外支店の口座が含まれることを通達により明確化。【法務省、28年内】
 - ー メガバンクに対して速やかな態勢の整備を要請。【金融庁、28年10月】
- 登記手続等に必要なサイン証明書(印鑑証明の代替)について、従来の、本人の国籍国、日本(国籍国領事)に加え、
 - ① 本人の現在の居住国等においても取得可能とするとともに、【法務省、28年6月】
 - ② 国籍国本国等で取得可能であっても日本における領事がサイン証明書を発行していない場合、日本の公証人の作成したものでよいこととする方向で検討。【法務省、28年度内】
- 法人設立後の銀行口座開設手続が円滑に進むよう、メガバンクに対し、対応できる支店等の集約、情報の共有、事務取扱の徹底等の態勢の整備を要請。メガバンクにおいて、年内を目途に態勢の整備を行う。【金融庁】

<その他の取組>

- ・ 会社設立関係の通達全文を掲載するウェブサイトを開設。【法務省、28年9月】
- ・ 登記申請等における外国語の提出書類の日本語への翻訳を省略することができる例を明確化。【法務省、28年度内】
(例: 外国会社の取締役会議事録のうち、申請に関する内容以外の部分)
- ・ 定款認証手続等において割サインを不要とする。【法務省、28年度内】

2. 在留資格関係

- 在留資格に関する手続を窓口に出向かずに済むよう、オンライン化を平成30年度より開始すべく、所要の準備を進める。【法務省】
- 手続に要する期間の見通しが立てやすくなるよう、所要期間の実績データの公表や、申請者が案件の進捗状況をオンラインで確認できる仕組みの導入について検討。【法務省】
- 高度外国人材の受入れを促進するため、
 - ー 世界最速級の「日本版高度外国人材グリーンカード」を創設 【法務省、28年度内】
 - ー 高度人材ポイント制※の要件見直し(評価項目の追加等) 【法務省、28年度内】 ※配偶者のフルタイム就労、家事使用人帯同等の優遇措置あり
 - ー 高度外国人材が帯同する家事使用人の受入れ要件(海外で継続雇用していた家事使用人と同時期に入国)について、高度外国人材の入国後でも呼び寄せられるよう見直しを検討。【法務省】

3. 行政手続のワンストップ化

- 東京開業ワンストップセンターの取扱業務を拡充。【内閣府等、28年内】
 - ① 登記、税務、年金等の6事務の電子申請を可能にするとともに、全てのブースで申請の受付等を可能に。
 - ② 取り扱う在留資格の対象に「技術・人文知識・国際業務」を追加(※現行は「経営・管理」「企業内転勤」のみ)するとともに、申請できる期限を段階的に延長し、平成30年4月を目途に、法人設立後5年以内まで延長(※現行は法人設立後6か月以内)。

4. 外国語での情報発信

- 事業活動や生活に関してニーズの高い情報の外国語での発信の強化。【各省庁】
(例: e-Taxの主な操作マニュアル、主要な申告書や通知書の説明、社会保険等の手引きなど。)
- JETROのウェブサイトを各省庁の外国語情報に関するポータルサイトとする。

5. 輸入関係

- 統計品目番号(HSコード等)の「国内細分」の統廃合の推進による企業の分類作業負担の軽減。【財務省等】
(例: 衣類は統計把握の必要性が低い国内細分の30年度統廃合実施に向け検討(Tシャツは29年度実施)。がん具は29年度の関税改正において国内細分統合を予定。)
- 輸入者等の利便性を高めるための情報発信の充実。【財務省・厚生労働省、28年度内】
(例: 輸入品目別に必要な法令手続情報(税関HP)、食器等の輸入時の検査に必要なサンプル数の目安や試験成績書に記載すべき事項・留意点(厚生労働省HP)など)